

「え？ お前それマジで言ってんの？」

缶ビール片手に信じられないといった表情でこちらを見てくる有坂さんにムツとしつつ、手に持った缶チューハイを一口呷ってから「そんなに变ですか？」と返した。

有坂さんはローテーブルに乗ったツマミに手を伸ばし「いやだって……」と言いながらそれを口にする。

仲の良い先輩の自宅でダラダラと飲む気楽な酒の席で、話題はプライベートな部分にまで突っ込んでいた。

有坂さんは会社の2年先輩で、まだ新人だった頃の俺に仕事について色々と教えてくれた元教育係だった。

社会に出たての俺に仕事の内容やルールやらマナーやらを、一から十まで徹底的に厳しく教えてくれた、とても優しい先輩である。

その頃から飲みに誘ったりもしてもらっていて、二年以上経った今ではお互いの家で飲むくらいの親しい間柄になっていた。

「音無ってオメガ……だよな？ オメガなのに性欲ないって、そんな事あんの？ だってヒートとかあんじゃない。ヒートの時は流石にエロい気分になっちゃうだろ？」

「セクハラで訴えますよ。……ヒートは……体質ですかね。俺あんま症状出ないんですよ。フェロモンもすごい少なくて……なんで抑制剤で簡単に抑えられますね」

有坂さんは外では話せないセクハラ含むデリケートな内容を平気で聞いてきて、俺はそれにツッコミながらも平然と答えた。

酔いも深まった頃に話題はなんとなくシモの方へ移った。

俺にとっては全く興味のない話題だったので有坂さんの話にも適当に頷いていたら、そんな後輩の可愛くない態度が不満だったのかこっちにも話を振られた。

しかし振られても特に話す事がないと、正直にこれまでに一度も性体験がないと明かすと有坂さんは驚き、更にはそういった事にも一切興味がないと続けると先の発言に繋がった。

「マジか……いや、確かにお前の口からヒートだから休むとか聞いた事なかったわ。なんつーか……色々アレだけど、そういうの聞くとやっぱお前って一応はオメガなんだな。ホント全然そう見えないけど」

「はあ……」

セクハラに続いて失礼な発言を堂々とする先輩に「結構酔ってるなあ」とそんな感想を抱く。

学生時代から友人に数え切れない程言われている言葉に今更何の感情も湧かなかった。

オメガを象徴する美しい顔も華奢な身体もなく、顔の作りも身体つきも一般的なベータと変わらない。

アルファ相手に怯える事も媚びる事もなく普通に会話して、その上ヒートによる体調不良や休みの申請もないとあっては、言わなければ誰も俺をオメガだとは思わなかった。というか言っても信じてもらえないくらいだ。

会社でも別に隠してはいないのだけど、俺をオメガだとちゃんと認識してる人はいるのだろうか和新人時代から疑問を感じている。

有坂さんは俺の平凡顔を見てその綺麗に整った顔を柔らかに苦笑させた。

「他のオメガだとすぐに誘ってくるからさあ。こんな長い付き合いのオメガに一度も誘われないって俺マジで初なんだよね」

「……………それ、ヨソでは言わない方がいいですよ」
イケメンがイラッとする事を言ってきたので素っ気なく返したが、有坂さんならまあそうだろうなと内心で納得していた。

有坂さんはアルファだった。

イケメンでモデル並みに背が高く足もすらりと長くてそして仕事は早くて完璧という、オメガらしくない俺とは違ってとてもアルファらしいアルファだった。

オメガに対して見下したり嫌悪感を持ったりなんていう事もなく、分け隔てなく親切で優しくフレンドリーで、そんな有坂さんなら確かに周りのオメガは放っておかないだろうと思う。

実際に他部署や取引先のオメガが有坂さんに話しかけているのを何度も見ていた。

ちなみに普通は、オメガの新入社員にアルファの教育係がつくなんて本当にあり得ない話なのだけど、俺がオメ

ガだと部署の人は誰も気付かなかった為にそのまま滞りなく研修期間が終わった。

人事部や部長とかは俺がオメガだと知ってる筈なのに、誰からも何も言われなかったのもそれは今でも疑問だった。

まあおかげで、気のいい先輩とこんな話をできるくらいに関係になれたのだから文句は全然ないのだけど。

「でもホントにセックスとか興味ないの？
全く？ まだ若いのにそんなのつまんなくね？ セックスって気持ちいいよ？ やって見たらハマるかもよ？」

という気分をぶち壊す尊敬する先輩のセクハラが続く。

「いいですよそういうの。ホント興味ないですから。そういうのが面倒くさくてヒートも薬で抑えてるんです」
ハアッとため息を吐いてあからさまに面倒くさいと、表情にも声にも態度にも表しているのに有坂さんはわざわざこちらに近寄って言葉を重ねた。

「そうだよ、ヒートだって一応あるんだし、フェロモンが少ないって言ってもゼロじゃないんだからさ。音無、試しにちょっとエッチな気分になってみない？」

「はあ？？ 何言ってんですか。ちょ、近寄ってこないでください。エッチな気分って……ここで自慰でもしろってんですか？ 強制猥褻で訴えますよ」

流石にそんな事を後輩に強要してくるなら殴ってでも酔

いを覚ませようと思ったけど有坂さんは笑って否定した。

「そんな事言わないって。ただちょっと俺に任せてくれれば、音無もエッチな事に興味出てくるんじゃないかなあって」

そう言いつつ有坂さんは俺が引いてるのにも構わずどんどん身体を近づけて、終いには俺の身体を後ろから抱える体勢になった。

「……何やってんですか。任せるって、一体何するつもりなんです……？」

抵抗するのも面倒くさくなってアルファである先輩の腕に大人しく収まる。

この人に好意を寄せているオメガなら卒倒ものの体勢だが、そうではない俺はただただ面倒だから早く終わらせようという気持ちでいっぱいだった。

「まあまあ、お前はしばらく大人しくしてればいいだけだから。マッサージを受けるつもりでリラックスしてなさい」

そう言う有坂さんの至極楽しそうな声に俺は『まあどうせ無駄だろうし、暫く付き合えば飽きるだろう』とため息を吐きそれに従った。

そうして 10 分後――

ふにゅ…♡ ふにゅ…♡ ふにゅ…♡ ふにゅ…♡ ふにゅ…♡ ふにゅ…♡

「ふっ……♡ ふっ……♡ ふっ……♡ ふう……ふう……♡♡」

「うんうん、だいぶイ感じになってきたな」

「っ……♡」

そう言ってスリスリと腹を撫でる有坂さんの手の感触にまた息を詰めた。

さっきからずっと腹を触られている。

下腹部を中心にスリスリと撫でたり、ふにゅふにゅと押してきたり、後ろから腕を回され優しい手つきで俺はずっと『ソコ』を触られていた。

最初は本当にマッサージのような事をされていた。

肩が凝っていると言われそこを揉まれたり撫でられたり、あとは首と頭とかをマッサージされて、それが普通に上手くて気持ちよかった。

段々と本気で身体はリラックスしてきて有坂さんに身を任せていると、手はゆっくりと胸とか腹とかを撫で始めた。

たぶんこれから本番なんだろうなとそんな可愛くない事を考えながら、大抵のオメガならアルファに胸を触ら

れれば可愛い反応をするところ俺は無反応なまま撫でられていた。

ただ無反応ではあったけど、「気持ちいい？」と問われれば「まあそうですね」と返すくらいにはその手を心地よく感じていた。

そうして胸を触られても大した反応をせずにぼうっとしていて、そろそろ飽きてくれないかなあ……なんて思っていたら不意にトン…と、腹を撫でていた方の手が臍の下辺りを指で叩いた。

何でそんな場所を叩いてくるのか分からず有坂さんに寄りかかったまま指の動きを見つめていると、トン…トン…トン…と叩かれる位置が段々下がっていった。

そしてある所でトンーと叩かれた時に、どうしてか腹がピクン♡と痙攣した。

「ココか」ー有坂さんはそう笑って繰り返しその位置を小突き、そっから俺の身体はおかしくなっていた。

トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡ トン…♡

「はっ……はっ……はふ……っ♡♡ っ……うゝ……っ……♡♡」

またさっきと同じように指で叩かれる。

さっきと同じ強さで叩かれている筈なのに、さっきより

もなんだか腹がムズムズしてしょうがなかった。

「ホラホラ、もっと寄りかかって。リラックスリラックス」

「ふッ……ッ……♡♡」

無意識に起き上がろうとした身体を引き戻され有坂さんの胸に頭を押しつけられる。

有坂さんは部屋のベッドに寄りかかり俺を抱え、落ち着いた低い声で囁きながら優しく俺の腹に振動を与えた。

「ちゃんとしっかり俺の指を感じるんだぞ。リラックスした状態で指に集中して。叩かれてる腹の奥意識して。……ほら、自分でも『ドコ』を叩かれてるか、分かるだろ？」

「ふッ……♡ ふッ……♡ ふッ……♡ ふッ……♡」

トン…♡ トン…♡ トン…♡ 一定のリズムで指が『ソコ』をノックする。

その振動が腹の奥へと伝わる。

24年間一度も意識してこなかった『ソコ』へ、有坂さんの指が優しく呼びかける。

「なあ音無……この奥に『ナニ』があるか言ってみな」

トン…♡ トン…♡ トン…♡ 有坂さんの指の振動を奥で感じると共にその声が頭の中に響き渡る。

上から覗き込んでくる顔はこれまでに見た事がないくらい優しい表情をしていて、それでいて目が眩む程に美しく、そしてセクシーだった。

これがアルファの本気かとクラクラしながらそれを見つめ、答えたくないのに口が勝手に動き出す。

「ふッ、っ……♡ ……し、子宮……ですか……っ？♡♡」

そう口にして……口にした瞬間に、ますますその場所に意識が集中した。

「せーかい」

「ッッッ〜〜〜〜♡♡♡」

ニッコリ笑ってクリクリクリクリ〜〜♡♡と叩いてた場所を――子宮を押してきた。

「音無の子宮、すごい喜んでるよ。ずうっと放っとかれて寂しかったのかな？ 俺の指にこんなに反応してる」

「ッゝ……♡ ツゝ……♡ ツゝ……♡」

可哀想にとでも言わんばかりに指がスリ…♡スリ…♡と慰めるように動き、それに子宮がピク♡ピク♡と反応した。

「ふっ……ふっ……♡♡」

何で自分の身体がこんな風になっているのか全然分らない。

子宮なんて本当に自分にあるのかと疑わしくすら思っていたのに、有坂さんに腹の上から押されただけでソコがこんなにも存在を主張してきている。

これまで大人しくしていたのが嘘のようだ。

「はっ…♡ はっ…♡ っ……ふ……う……ッッ♡♡」
子宮が熱くなるなんて初めての経験で、生まれて初めての感覚に身体が混乱した。

「ほら、指で押すと子宮がキュンキュン言ってるのがわかるよ。可愛いね。俺の指に甘えてるみたいだ」

「ふッ…♡ ふッ…♡ ツ……な……なに、言って……っ♡ し、子宮が……寂しいとか……甘えるとか……そんなの……あるわけ……ッッ～～～♡♡」

有坂さんの言葉に息を震わせながら反論すると、指一本でソコをクリックリン♡♡回すように押された。

ピンポイントで責められる感覚に甘い痺れが襲ってくる。

言葉を詰まらせた俺に有坂さんは指をクリクリ動かし「ん～～」と態とらしく唸った。

「そっかそっか、音無はようやく子宮を自覚できたばかりだもんな。まだ自分じゃわかんないか」

「ふう…っ♡ ふう…っ♡ な、なに……っ♡♡」

いやに楽しげな声が耳に届く。

「こうしてると指に伝わってくるんだよ。音無の子宮が、気持ちいい気持ちいい♡もっとして♡って言ってるの」

「ッッ……♡♡ ～～っな、なに、バカなこと言って……っ♡♡」

普段とは全く違う低くて甘い声が、子宮をグニ♡グニ♡押しながら囁いてくる。頭の中がジン♡ジン♡熱くなっ

て子宮がキュン♡キュン♡震えて、訳がわからなくなり
それでも口は必死で否定の言葉を吐いた。

「音無も、自分の子宮がキュウッて締めつけてるの分かるだろ？ ほら……俺が指で押したりしたらキュウキュウって奥が締まってる。これって、音無の子宮が気持ちいいって言ってるんだよ。俺の指に撫でられて気持ちいいって、嬉しいって、子宮が甘えてるんだよ」

「〜〜〜ッ ツ♡♡ い、言ってない……そんなの……言って……ツツ♡♡」

腹の上からフニユ♡フニユ♡押してスリ♡スリ♡撫でて、有坂さんがそう何度も繰り返した。

『子宮が気持ちいいって言ってる』なんて、変な事言っ
て俺を惑わしてくる。

それを必死で口では否定するけど子宮の反応は抑えられなかった。

甘く囁く声に更にキュウ♡キュウ♡締めつけてきて……
それが本当に気持ちいいって言うように自分でも
段々と思えてきてしまった。

トロオ……♡

「ツツツ……！！♡♡」

身体の奥から温かいトロツとした液があふれてくる。

それは下半身のあらぬ所から漏れ出て穿いている下着が
ジワ……と濡れていくのを感じた。

人生で経験した事のない感覚に驚き、どうしようと狼狽していると、また有坂さんの声が聞こえてくる。

「相変わらず素直じゃない口だねえ。子宮はこんなに素直で甘えたなのになぁ？」

スリ♡スリ♡甘やかすような手つきで下腹部全体を撫でられ甘い疼きが一帯に広がっていく。

更にトロ…♡トロ…♡と、自分のソコから初めて愛液が流れている事実で動揺し、なのにその原因である有坂さんは優しい顔で呑気な事を言うから変にイラッとした。

「っ…♡ っ…♡ ふっ……♡ わ、悪かったですね……っ♡ 可愛くない後輩で……っ♡♡」

身体は気持ちいいのに頭の中は妙にイライラして、口からは可愛げの欠片もない言葉が衝いて出る。

自分が可愛くない事なんか百も承知だと、何から何まで可愛くない態度で息をフ～♡フ～♡荒げ言い返す。

そんな俺を有坂さんはキョトンとした顔で見て、その後にもまた一段と優しい顔で「バカだなあ」と笑った。

「可愛くないなんて一言も言ってないじゃん」

そうして空いてる手で俺の口をスルリと撫でた。

「この素直じゃない口も」

続けてスリスリと愛おしげに腹を撫で「素直な子宮も」と囁く。

とろりと甘やかに濡れた眼差しで真っ直ぐに俺を見つ

め、有坂さんは更に言葉を綴った。

「アルファの俺に物怖じしない態度も、結構負けん気が強い性格も、それでいて俺にだけは弱いとこ見せて頼ってきてくれる所も、全部可愛い」

唇を撫で、続いて目尻を撫でるとまた言葉を重ねた。

「目つきキツいって言われて意外と気にしちゃうのも可愛いし、小さくて丸くて形のいい頭も可愛いし、スッカリとした顔の作りもスゴく可愛いよ」

間近で見ても擦り傷一つない美しい手が俺の頭を優しく撫で、流れるように頬をスリ…と撫でた。

「音無は平凡顔だって言うけど俺は全然そうは見えないな。キツイ目つきも薄くて小さい口もキレイな鼻筋も、そらのオメガより全然可愛いよ。……音無が、世界で一番可愛い」

「……………」

はえ？？？」

一瞬全ての快感が吹き飛んで頭が真っ白になった。